

◎野木京子 5月

骨壺に花火を入れていたっていい 細村 星一郎（東京都）

*骨壺という小さな有限の（幽玄の）空間。そこに花火という四方に広がる無限の（夢幻の）イメージを重ねた。花火は生命の象徴で、壺のなかの骨だっって少し前までは生命の側にいたはずという哀切さを感じる。

教室の床の軋みに棲む孤独 まちりこ（埼玉県）

*孤独でない人は床の軋む音に気付かないし、聞いてもすぐに忘れてしまう。孤独な人は、自分が立てた思いがけない音に自分で驚き、音を立てたことに苦しむ。孤独とは心が軋んで音を立てているという意味でもあるか。

夕焼けの ポッ

朝日の キャ

どちらも

いい声だ 武中 義人（岡山県）

*読んで幸せな気分になる。夕焼けは「ポッ」という声を（音ではなく声を）あげているように思えるし、朝日は「キャッ」と、今日の世界に登場したことに自分でびっくりしている。「いい声だ」という肯定が気持ちよい。

定規で闇の大きさを測る 長谷川柊香（宮城県）

*闇は定規のように小さなものよりはるかに大きい。闇は見ることができないのだが、定規という有限のものを示すことで闇の存在が際立ち、見えているような気持になる。

整体で骨を念入りに探られる時

私の思考は宇宙の彼方

佐々木みつる（東京都）

*自分の骨は自分の体の一部なのに、直接触れることはできないし、たいてい見ることもできない。わたしたちは宇宙の内部で生きているのに、宇宙の彼方を触れることも見ることもできない。宇宙とはひょっとして大いなる存在の背骨の中にあるのかもなどと、この詩を読んで想像した。

骨は骨 煙は煙 父は父

まちりこ（埼玉県）

*まちりこさんの作品を佳作に複数選ばせていただいたが、どれもよかった。火葬場でお骨を見ても父とは思えない。煙になってしまったとも思えない。父はいつまでも父なのだから、自分の心の中に探したときにだけ会える。

隣人が夜勤へ向かう

単色の麺をゆがいて

まだ生きている

豊富 瑞歩（茨城県）

*「単色の麺」と書かれていると、妙にもの哀しい、生きるぎりぎりの気配が感じられる。隣人が部屋を出ていく音に耳を澄まし、耳は開いているけれども、心や部屋は閉ざされているようだ。それでも「まだ生きている」に希望を感じる。

子供らを叱る自分も

草臥れて

庭の雑草すくすく伸びゆく

加藤 美紀（愛知県）

*この気持ち、よくわかる。結局子供らはすくすくと雑草のごとく逞しく育っている。「草臥」とは疲れて草に伏すという意味で、くたびれたときに支えてくれるのは地面の雑草だったり、母親の言うことを聞かない子供らだったりする。

手をつなぐと

君の形に手が歪む

恋をすることは

わたしを歪ませることなのだ

椎名少雪（三重県）

*なるほど。恋をすることは、自分の内面を相手に譲り渡すことでもある。相手に心を渡すことを、「歪ませること」と記す感性が新鮮だ。

手違いで地球にやって来た

火星人の顔して

物理をまなぶ

さいう（愛知県）

*遠い火星から地球まで来ることができた火星人は、きっと頭が良くて、物理などもすらすらわかるはず。勉強して頭が良くなるとは、少しずつ宇宙人のようになることかもしれない。楽しい発想。